

「立ち上がる農山漁村 ～新たな力～」選定団体概要書

1. 「新たな力」団体等名称

岩手大学農学部

2. 協働している取組の名称及び応募団体名

取組の名称：森林・林業日本一の町づくり

応募団体名：岩手県住田町(事例 No.11)

3. 協働している取組の概要

岩手県住田町では、高気密・高断熱へと移行する住宅木材需要に着目し、「杉の集成材」としての可能性に賭け、プレカット加工施設・集成材工場、集成材の材料となる板の製材工場と併せ施設の整備を実施、総額 50 億円を投資した。官民一体となった取組は功を奏し、10 年間で 50 億円の設備投資と、40 億円の売り上げは、過疎化と地元経済の沈滞に悩む地域経済にきわめて大きな影響を与えている。また、人口 6,000 人の町において、170 人の雇用を生み出したこと、特に若年男性を中心に雇用していることは、地域経済はもとより高齢化に悩む町において地域の担い手育成にも大きく寄与している。

平成 16 年には、国際的な取組である「FSC 森林管理認証」を地元森林組合が取得。同 COC(加工流通)認証を木工団地・住宅会社が取得し環境に配慮した森林経営と、環境に興味がある消費者への PR も行っている。木工団地においては FSC 認証木材は他の木材よりも高い価格で買い入れるなど、地域内での利益還元を目指している。木工団地での製品の大半は住宅建材であり、一般消費者には日常的に購入できるものではないことから、現在デザイナーとの共同により新たな木工製品の開発を行っている。

また、森林・林業を一部の関係者だけでなく、町内外を問わず多くの人たちに紹介しようと、森林・林業体験学習、炭焼き体験ツアー、地元の伝統食や伝統文化を体験できるイベント等を開催している。町外に関しては特に、リピーターを重視し、ダイレクトメール等を積極的に活用している。

4. 取組への協力のポイント

岩手大学農学部船越昭治教授と同学部生は、昭和 50 年代に、それまで地域で伝統的に行われていた林業を体系的に整理し、町の進むべき林業の方向性を明確にした「住田町林業振興計画」を策定し、これまで 3 回の計画策定を行っている。特に第 1 次計画は単独の市町村としては全国に例を見ない広範囲かつ細部にわたる調査に基づく地域に根付いた林業振興の方向性を示したもので、これが現在の林業振興の出発点となっている。

また、平成 12 年に同学部澤部攻教授が中心となり、木質バイオエネルギーの利用を図るため、残材等の経済性調査を行い、林地残材の不採算性を指摘、経済性を重視した「おが屑」を原料とした「住田型木質ペレット」の製造を提唱した。乾燥した木材から出るおが屑を使用することにより化石燃料の使用が抑えられ、採算に合致した生産が行われることとなった。

平成 15 年からは、同学部岡田秀二教授を中心とした国際的な取組である「FSC 森林管理認証」の指導及び知見の提供により、地元林業者の取得に貢献するとともに、森林認証制度を一部の林業関係者ばかりでなく一般町民にまで普及する施策を講じる取組のきっかけとなった。また、同教授の働きかけにより、「岩手大学ミュージアム」内に、住田町との連携による森林管理・木材加工事業等を「林業開発と木工製品」と題して、県内町村としては唯一の常設展示を行っている。